

変容する肉体。体が変わる瞬間が〈舞ってる〉って思うんだよね。

今日は前の用事が長引いてしまい、大幅に遅れて車で現場へ移動。

夜の稽古で中央の方へ行く時、自分が通る道が固定化されていることに気がつく。普段運転していたり、道を歩いている時に僕はルートについてあまり考えない。目的地が決まっている場合、無意識的に最短ルートを選んでいる。人と歩いている時、人と自転車で移動していても同様だ。

数年前、アートのピクニックアスという企画のお試しで、人と天神の街を歩いた時、街を演劇を観るように注意深く全神経を使って観察しながら歩いた。すると普段歩き慣れている街なのに、旅行に来たように新鮮で、別の世界を歩いているような感覚がしたのと同時に、普段歩くとは違った疲労を感じたことを思い出す。知らず知らずのうちに、習慣的に、見落としていることが沢山あるのだ。そして自分は歩くことや、移動そのものが目的となる散歩をいつからしなくなったのだろう。

演劇を作るという習慣の中で、約束事を決めて、道に迷わないようにすることは重要だ。けれど道に迷う覚悟を持って、大きな主語で物事を考え、語ることも同じくらい重要だとも考える。〈演劇とは〉〈踊りとは〉〈芸術とは〉〈人間とは〉。勿論、演劇は集団創作であるし、ずっと迷ってばかりもいられない。興行であり、旗振り係でもある演出家が迷ってしまえば全員が路頭に迷うことになる。

そういう意味では、このニューニチブというプロジェクトは、大きなことについて考え、迷うことができる、貴重な機会であるように思う。見慣れた道も、いちいち立ち止まり、辺りをキョロキョロしながら、疲れ果てながらゴールも自分で決めてみよう。

稽古場へ着くと、ちょうど五味さんと山田さんがディスカッションしている。今日はいつもより一段と狭いスペースで机と椅子は端に寄せてある。その先の、ぽっかりと開けられた空間の、壁沿いに体を動かす真吉の姿。試行錯誤が続いている。話に耳を傾けながら、途中から読み始めた本の中身を想像で埋めるよう自分でも考える。舞とはなんだろうか。

「変容する肉体。体が変わる瞬間が〈舞ってる〉って思うんだよね。今回は見えるもの、外側の状態から作りたい。」

「テーマ性としては鶴を待つってことで良くて、地続きもいい。あつたものがない、に関して、だけど残ってるってものがあるってことにしたい。」

「民話の鶴女房から受け取るものって、見ちゃいけないものを見ちゃだめってことなんだろうけど、私は見ちゃいけないものを見る力が人間にはあるんだって方で思ってる」

といった感じで、山田さんの発言を荒くメモしているので、色々厳密でなく誤解・誤認している可能性は十分ありながらも、正確性を優先して音声で記録を取るのをさけている部分もある。というのは、今回キーワードで出てくる〈語る〉ということと一緒に自分が考えていることが、〈託す〉ということだからだ。

批評家の小林秀雄が本居宣長について本を出す時に、人間は文字を発明したことで文字に託すようになり、記憶しなくなったという話を今回頻繁に思い出す。今はAIが発達して、人間の仕事が無くなるんだという話を耳に舐舐ができるくらい聞いてきたわけだが、それは便利になると同時に人間の本当は持っているはずの力が封印されているというイメージを持たせる。文字に託

す、ボイスメモに託す、動画に託す、AIに託す。

では、私たちは何をそれらに託しているのだろうか。稽古が終わってボイスメモや動画記録で正確に把握しようとして見返すのと、自分の記憶の中であの日、あの場所と出会い直すこと、それらにはどんな違いがあるのだろうか。近代化が進んで、人間の肉体にもともとそなわっていた機能、或いは何か損なわれているのだとしたら。昔の人間と今の人間に違いがあるとしてたんなりか。僕は演劇をする時、AIより人間の方が凄いという前提を捨てることができない。しかし、託すことで弱まってきたものがあるとしても、語り託すことで残っていたものもあるのだろう。小説家の村上春樹が、自分にとって小説を書くというのは、昔の人間が洞窟の中で即興で物語を語っているような行為と言っていた。今回の民話にしる、人間一人一人の個体は朽ちていても、人間同士が語り継ぎ、託し託されて残っているものもあるのだ。

ああ、話が逸れまくってしまった。結局、自分はこの思い出すということの中に、記憶という自分の精神との関係性の中で、こうして文章を書くということにこだわっているし、この関係性にナニカがあると思っている。ただそれだけの話である（メモくらいは取らせてもらうけれど）。

今日の最後に、山田さんが読んでいる岩波新書「日本の舞踊」からピックアップされたページを五味さんに声に出して読んでもらう。そこには、私たちが今考えていること、これまで感じていたことが、的確に言語化され、形となっている印象。

私たちは、〇〇とはなにか、という複雑で奥深い道を歩いている。

そうではなくて、実は舞踊というものをどう語るべきなのかということが、だれにもわかっていないからである。

岩波新書「日本の舞踊」渡辺保著 より引用